源流

渓(たに)の流れが力無く岩を越え

針葉樹が葬送に息を撓める中
僕は死の源流を訪ねるべく溯る
則ちそれは生の源流であろうか

生の息吹は常に大気の中にのみあり
この掌に触れることのできる全ゆる存在は
空を翔ける鳥に至るまで
ただ死のみをもって存在の証しを立てるものと見える

かつて僕は死によって証しを立てるという
そのことをもってして存在と見なした
けれども、その虚なることを悟るにいたり
現在ここに大気のみを案内者とすることになったのだ

月夜に流れを傍にして岩を枕とするうち
死の流れもまた生に似ていると感ぜられ
全てこの目に映じる活きるものこそは
生に非ず、死の悶える様とも見える

ならば流れを溯るこの僕の歩みは何としよう
生の営みではなく、死の流れだと言うのか
断じて、断じて差に然に非ず
僕は死の流れに逆らう者、死の源流を訪ねる者だ

朝(あした)となり、東に日の昇る時

僕に大気の中なる生は陽光に浮かんで流れ込み
再び僕は胸をふくらます
生ある者としてではなく
生を享けるべき者として歩き出すために

(1992.2.8)